A-5

ポスト・コロナの CST 英単語コンテストをめぐって

On the CST English Vocabulary Contest in a post-COVID Academic Setting

○丸聡弘[1]，鈴木孝[1]，ジョセフ・ファラウト[1]，中村文紀[1]，
ジョナサン・ハリソン[1]，乙黒麻記子[1]，秋庭大悟[1]，加藤遼子[1]

*Akihiro Maru[1], Takashi Suzuki[1], Joseph Falout[1], Fuminori Nakamura[1],
Jonathan Harrison[1], Makiko Otoguro[1], Daigo Akiba[1], Ryoko Kato[1],

Abstract: In 2020, the CST English Vocabulary Contest was cancelled due to COVID-19, and it was restarted in 2022. By comparing the contestants' TOEIC L&R IP scores with non-contestant scores, this paper explores problems and possibilities of the vocabulary contest that will give administrators the chance to accommodate the diversified needs of students in a post-COVID academic setting.

１．はじめに

本稿では 2022 年度に久々に実施された「CST 英単語コンテスト」（2022 年 12 月 12 日実施）の成果報告と検証を行うとともに，ポスト・コロナにおける同コンテストのあり方について考察する．一般教育教室 e-learning 研究グループは 2004 年から e-learning 教材の効果的な利用方法を模索してきた．「e-learning による語彙学習の効果 : CST 単語コンテストの結果から」（2019）をはじめとする同グループの論考において，①長期休暇中の資格試験対策講座における対面授業と e-learning 教材の併用による基礎学力の向上や，②電子メールや e ポートフォリオによる学習サポートの有用性について示してきたが，従来，授業外における学生の e-learning 利用率向上が課題となっていた．[1] [2] [3] [4] その利用促進を目的として，2016 年度以降，同研究グループは英単語コンテストを実施してきたが，コロナ禍以降，その実施が困難になり，2022 年度になって漸く，同コンテストを再開することができた．このコロナ禍という条件下で実施された 2022 年度の英単語コンテストの成果報告と検証を通して，ポスト・コロナにおける同コンテストの可能性を模索したい．

２．実施方法

従来どおり，2022 年度のコンテストにおいても，参加者は，マークシートによる選択式の 200 問の問題（英単語から日本語の意味を選択する問題が 150 問，日本語の意味から英単語を選択する問題が 50 問）に 15 分で解答し，正解数を競った．コンテストは学内実施の TOEIC L&R IP テストのスコアを基準とした，Basic コース（初級 345 点以下），Intermediate コース（中級 350～545 点），Advanced コース（上級 550 点以上）の 3 つのコースで行われ, 本学の学生全員が使用可能な e-learning 教材である NetAcademy NEXT の単語学習用コース,「英単語パワーアップコース TOEIC（R）テスト編」をもとに，各コースのレベルに応じた 3000 単語を出題範囲とした．10 月中旬に参加者の募集を行い，TOEIC L&R IP（後期）実施直前の 12 月上旬にコンテストを開催し，上位入賞者には賞品を授与した．参加者は Basic コースが 2 名，Intermediate コースが 6 名，Advanced コースが 14 名の計 22 名であった．因みに，コロナ以前の 2019 年 12 月 16 日に実施されたコンテストの参加者数は，Basic コース 8 名，Intermediate コース 23 名，Advanced コース 23 名の計 54 名であった．

	2019年	2022年
初級	8名	2名（1名が2回受験）
中級	23名	6名（5名が2回受験）
上級	23名	14名（6名が2回受験）

図1. 単語コンテスト参加者数の推移

３．前提 : 本グループによる先行研究

TOEIC L&R テストでは，受験者に返却されるスコアシートにおいて，Abilities Measured としてリスニングとリーディングのそれぞれの項目別正解率が示される．語彙に関する問題については項目 R4 においてその正答率が示される．この値が高いほどリーディングのスコアが上昇する傾向にあること，すなわち，語彙力が高ければ高いほどリーディングの点数が上昇する傾向にあることを，秋庭ら（2019）が確認している．このことを踏まえた上で，2022 年の英単語コンテスト参加者らのリーディングの点数を確認しておきたい．

１：日大理工・教員・一般

４．結果と考察

2022 年度のコンテスト参加者 22 名のうち，同年 7 月と 12 月に学内で実施された 2 回の TOEIC L&R IP テストを受験した 12 名のリーディングの平均スコアは、Basic コースは 7 月から 12 月にかけて 20 点上昇（1 名），Intermediate コースは 25 点上昇（5 名），Advanced コースは 5 点下降（6 名）という結果であった．コンテスト参加者全体では 10 点の上昇となる．対して，同じく 2 回のテストを受験した受験生全体でのリーディングの平均スコアは 11 点上昇している．コロナ以前であれば，e-learning の有効性や，その利用促進のための英単語コンテストの有用性を検証することは容易であった．しかし 2022 年度に関しては，コンテスト参加者全員の数値と受験生全員の数値との間には，明確な差がないことが分かる．未曾有の事態が続くなかで，e-learning および英単語コンテストのあり方について改めて検討せねばならないのかもしれない．

	2022年7月→同年12月
初級	＋20点（1名）
中級	＋25点（5名）
上級	−5点（6名）
学部平均	＋11点

図2. コンテスト参加者のスコアの変化

もちろん，コンテスト参加者の上昇値と，受験生全員の上昇値とがほぼ同じである一方で，Basic コースや Intermediate コースの参加者らの平均スコアの上昇率が，受験者全体の上昇率の約 2 倍であるという事実を見逃すことはできない。様々な意味において学生の多様化が進んでいる本学においては，英単語コンテストのようなイベントに関しても，「要か不要か」といった包括的な視座ではなく，個別的な視座から，その成果や可能性等を検討する必要があるだろう．当コンテストに関して言えば，Basic コース，Intermediate コース，それから，Advanced コースの各参加者の TOEIC L &R のスコアが上昇するように，コンテストを細やかに設計していくことが肝要なのである。

５．結論

コロナが英単語コンテストに及ぼした影響が決して小さくはないことは，コロナ以前と以降それぞれの参加者数から明らかだと言いうる。今後の課題として，まずは，英単語コンテストの存在を学生に周知するための方法を e-learning 研究グループ内で検討していかねばならない．その上で，英単語コンテストがコロナ以降の世界においても，ある特定の層の学力強化に一役も二役も買っていることを念頭に置きつつ，出題方式や難易度等についても再検討をしたい．こうした全てを再検討していくにあたり，今回の英単語コンテスト時に実施した，参加者アンケートの回答内容に耳を傾けるようにしたいと考えている．

参考文献

[1] 谷岡朗，中川浩，周一川，郭海燕，鈴木孝，多惠基継，ジョセフ・ファラウト，中村文紀，ルート・ヴァンバーレン，ジョナサン・ハリソン，福田敦，石坂哲宏：「TOEIC Bridge との関連から見た英語 e-learning 学習の活用について」，第 53 回日本大学理工学部学術講演会(CD-ROM)，63-64，2009.

[2] 内堀奈保子，谷岡朗，鈴木孝，多惠基継，ジョセフ・ファラウト，ルート・ヴァンバーレン，中村文紀，ジョナサン・ ハリソン，乙黒麻記子：「電子メールサポートを利用した e-learning の活用：2012 年度「TOEIC 短期攻略講座」の成果から」，第 58 回日本大学理工学部学術講演会(CD-ROM)，7-8，2014.

[3] 秋庭大悟，谷岡朗，鈴木孝，ジョセフ・ファラウト，中村文紀，ジョナサン・ハリソン，乙黒麻記子，内堀奈保子：「e ポートフォリオによる自主学習のサポートの有効性とその課題」，第 60 回日本大学理工学部学術講演会(CD-ROM)，28-29，2016.

[4] 秋庭大悟，鈴木孝，ジョセフ・ファラウト，中村文紀，ジョナサン・ハリソン，乙黒麻記子，丸聡弘：「e-learning による語彙学習の効果 CST 英単語コンテストの結果から」，第 63 回日本大学理工学部学術講演会，2019.